

Anything
Considered

南仏の
トリュフを
めぐる
大冒険



ピーター・メイル
池央耿=訳

*Anything
Considered*

南仏の
トリュフを

江苏工业学院图书馆

大冒險章

ピーター・メイル
池央耿=訳

河出書房新社

Peter Mayle:

ANYTHING CONSIDERED

© 1996 by Escargot Productions, Ltd.

(Drawings in the text by George Wilson)

The Japanese translation rights arranged with Escargot
Productions, Ltd. through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.



南仏のトリュフをめぐる大冒険

©1997 Printed in Japan

1997年1月10日 初版印刷

1997年1月20日 初版発行

著 者 ピーター・メール

訳 者 池 央耿 (いけ・ひろあき)

装幀者 渋谷育由

発行者 清水 勝

発行所 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話 (03)3404-8611〔編集〕 (03)3404-1201〔営業〕

振替 00100-7-10802

印 刷 中央精版印刷株式会社

製 本 中央精版印刷株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-20273-X

●
目次

- 1 万事相談。ただし、結婚は除く 7
- 2 ヘーラルド・トリビューン 私書箱八四 27
- 3 バレー・ダンサーの夢は絶たれた 39
- 4 これによってフランスが減じるかい？ 55
- 5 トリュフ——黒いダイヤの神秘 67
- 6 何でも君の好きなようにしよう 83
- 7 言い訳はいらない 101
- 8 幽閉の暮しに馴れた 117
- 9 戦車を動かせる女性は私だけ 131
- 10 これが片づいたら、君はどうするの？ 155
- 11 遠くに小さな港が見えていた 179
- 12 あなた、追われているの？ 195

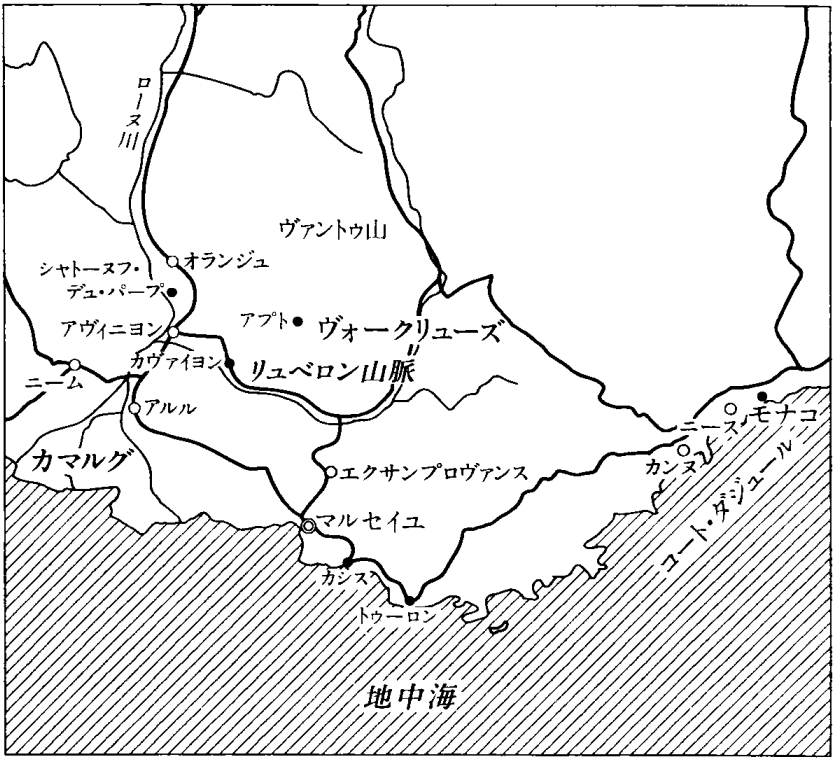
- 13 酒中に至福あり 209
- 14 石を投げればコルシカ人にあたる 221
- 15 希望は風船のようにしぼんだ 229
- 16 教会の下見に行かなくては 241
- 17 神の加護がありますように 251
- 18 さあ、こうしてはいられない 261
- 19 大統領は関心を示した 271
- 20 百万ドルのことだけは言わないで 283
- 21 メニューを見せてくれませんか 297
- 22 バッグをお預りいたしましょうか 311

著者覚書

トリュフ栽培と空手について、進んで知識を提供してくれたエリザベス・オハラ『ボイスとリシャル・ラ・ブランド』に感謝する。本書の記述にいささかなりと間違いがあるとすれば、それはすべて著者の責任である。

これは架空の物語である。登場人物とその名前はいずれも創作であって、実在の人間とはいっさいかわりがない。ただ、ロード・グリーブに限っては、似たような人物がいるかもしれない。

南仏のトリヲをめぐる大冒険



A SNOOPING
MAID.



万事相談。ただし、結婚は除く

そのうち何とかなるだろう。ベネットは繰返し自分に言い聞かせた。天氣が好くて、どこからも請求書の来ない平和な日には、このにわか貧乏も人生模様のわずかな染みと割り切って思い煩うことはなかった。運命がしゃっくりをしたくらいの話で、ほんの一時の不如意でしかない。が、そうは言っても、現実から目を背けるわけにはいかなかった。懷は淋しく、やがては小切手も不渡りになるだろう。人に良からぬ噂を伝える時の銀行屋の常で、支店長が陰湿な快感を愁い顔に隠して指摘した通り、総じて先の見通しは暗く、暮し向きはなほだ心許ないありさまだった。

さりながら、ベネットは生まれ落ちての楽天家で、おまけに、フランスを引き払う気はさらさらなかった。そんなわけで、素人にしては物件を見る目があり、お手軽に仲介料を稼ぎたい切実な要求に迫られていることを除いては、これといって資格も才覚もないままに、彼は身のなりわいに出物を漁って南仏プロヴァンスの片田舎を渡り歩く不動産業者の数に加わった。不動産業者、アジャン・イモビリエと一口に言っても、中にはベネットとさして変りない、ほんの素人に毛の生えた程



度の周旋屋もいた。そうした先輩業者たちに倣^{なま}って彼は毎日、昔の面影を留める廃屋や、住宅に改築できそうな納屋を捜し回った。手を加えれば立派に人が住める豚舎、造りに特色のある羊の牧舎、今は使われていない鳩舎、崩れかけた寺院。思うさま想像力を働かせ、それ以上にふんだんに金を注ぎ込んで、ちょっと気のきいた住宅に生まれ変わる見込みさえあれば、物件は何だろうと構わなかった。

なかなか楽な商売ではなかった。なにしろ競争が激しい。生き馬の目を抜くというのがこれで、いつかベネットは、この業界には買い手よりもはるかに多い不動産屋が^{ひしめ}いているのではないかと思うようになった。市場は弱含みだった。元凶は強すぎるフランである。とりわけ、アメリカ、イギリス、オランダ、スウェーデンから見てもフランはあまりに高かった。スイス人は懐が豊かだったが、持ち前の分別と根気でフランの値下がりを待っていた。そんな中で不動産を買いに出るのは金あまりでマルクが唸^{うな}っているドイツ人か、たまたま遺産が転がり込んで投資先を捜しているパリ人ばかりだが、それとても、石を投げれば当たるほどいるわけはなく、商売はふるわなかった。

そうこうするうちに、前の年の夏、ベネットは自分でもあまり上趣味とは言えない出任せの冗談がきっかけで、イギリスの上流階級に出入りの不動産業者として信用も増し、顔もきくようになる、ささやかながら見込みのありそうな副業にありついた。

夏ごとに、一年分の日照とニンニクを摂取する魂胆でプロヴァンスに押しかけてくる異邦人仲間のパーティーに呼ばれたのがことのはじまりだった。定住者で、まんざら男ぶりも悪くなし、英語が通じるベネットは頼りになる便利屋で、異邦人社会では引っぱり風だった。ゴシップはうんざりだが、旨いものが腹いっぱい食えて、いくらでも酒が飲めるから、声がかかればどこへでも出かけて

いく。

倦怠は職業病、戯れはその特効薬という。星の降る八月の一夜もそれは同じだった。テラスの敷石は昼間の温もりを残し、見はるかす谷を隔てた彼方には中世の町ボニューのスカイラインが横たわっていた。

来合わせた客たちはイギリスの政治の将来や、王室の若殿たちの雇用機会をめぐって際限もなく思惑談義を交した。生酔い加減で社会時評も聞き飽きたベネットは、退屈しのぎにその場の思いつきで、裕福な別荘の所有者たちにははじめての、何とも頭の痛い厄介な話を持ち出した。空巢狙い、水道管の凍結、プール荒らし、手癖の悪い使用人、といった毎度お馴染みの苦情とは違い、これは別荘住民の耳を驚かせる新奇な話題だった。

スモーク・サーモンを頬張りながら、ベネットは内心からかい半分に、田園地帯にあつて日常生活の根幹にかかわるところへ脅しをかけた。給排水管の衛生問題である。聞くところによれば、近頃この地方一帯に、糞虫によるかつて例を見ない質の悪い虫害が発生しているという。糞虫はタマオシコガネ、マグソコガネ、センチコガネ等、哺乳動物の糞に集まり、これを食べ生活する甲虫の仲間だが、使われていない浄化槽と見ればそこへ侵入して、下水網に病毒をはびこらせている。糞虫と旅行者は相性が悪いから、市当局はむろんこの事態をひた隠しに隠そうとしているが、糞虫が繁殖していることは厳然たる事実である。虫どもは別荘に^{ひと}人気の絶えるのを待っている。放っておけば、一円の下水管が糞虫に占拠されることにもなりかねない。

オックスフォードから来ている、いずれ劣らず血色のいい夫を持った二人姉妹は聞くほどに眉を曇らせた。驚いたことに、二人はベネットの話をすっかり真に受けていた。



「おお厭だこと」姉妹の片方が生つ粹の南部イギリス訛りで言った。「どうしたらいいの？
だって、うちも冬の間は空っぽよ」

「そう、定期的に水洗を流すしかないですね」ベネットはわけ知り顔にうなずいた。「少なくとも週に二度。それで虫は溺れて死にますよ。両棲類じゃありませんから。ああ、その海老、誰も食べないんですか？ 残すなんて、もったいないなあ」彼はにんまり笑って姉妹の傍を離れ、地元の室内装飾家に捕まって往生している若い女性を助けにテラスへ出た。鈍重で度し難い男、とはなはだもって評判のよくない装飾家は、果たせるかな、くすんだチンツの時代を超越した魅力について愚にもつかぬことを、題目でも唱えるかのようにくどくどと述べ立てていた。ベネットは涼やかに吹き込む風と割って入った。

一方、ベネットがそれとは知らぬ間に、オックスフォード姉妹は誰彼の別なく糞虫来襲の報を触れ回った。パーティが果てる頃には、糞虫はサン・レミからエクス・アン・プロヴァンスへかけて、無人の家屋という家屋の衛生設備を脅やかすまで蔓延した。共同の敵を前に、浮き足立った別荘所有者たちはただちに結束して、帰りがけるベネットを待ち伏せた。

「その害虫の件だがね」選挙戦を控えて体力を養っている元閣僚が一同を代表して言った。「どうも、これは憂うべき情況に立ち至る虞おそれなしとしない」陽に焼けた顔が一斉にものしきうなずいた。「ついては、今もここで話し合ったのだが、私らが引き揚げた後、君に留守番を頼めないものだらうか。私からすれば、つまりその、現地駐在員だね」元閣僚は、やむなく俗なことを口にする時のイギリス流儀で声を落とした。「もちろん、頼まれてくれるとなれば、それ相応のことはさせてもらうよ。そのために君が費す時間と労力に対しては正當に報いよう。でなかったら、どうし

てこんなことをお願いできるものかね」

ベネットは面々を見渡した。裕福な中年の男たち。それぞれに、裕福な中年の友人知人が多くいるに違いない。彼は咄嗟に腹を決めた。「いいですよ。喜んでお引き受けしましょう。でも、謝礼なんて、そんなことは忘れて下さい」それではこちらの気が済まない、と男たちが言うのを、ベネットは手をふって遮った。情は人のためならず。顔馴染の縁で協へ紹介してもらい、売買契約が成立した例は同業仲間の話にも稀ではない。不動産屋はたいがい不在家主に頼まれて雑用を請負っている。冷蔵庫を満たしておくことから、飲んだくれの庭師をお払い箱にすることまで、その中身はさまざまだが、同業の誰一人、これほど信用篤い者はいない、とベネットは密かに自ら恃むところあった。しかも、彼の場合は地位が伴っている。公認排水士、浄化槽監視員、衛生検査官——アンスペクトウール・サニテールである。その後ひっそりと静まり返った冬の数か月、彼は喜々として仕事にいそしんだ。

ベネットは磁器をかぶせた把手を押し、勢いよく迸る水の音に満足げに耳を傾けて、クリップボードの名前に検査済の印をつけた。ノッティンガムの辛子王、カールマン。人が皿に残すやくだいもないものを商って財をなした、と方々でうそぶいている男である。富をひけらかして悪びれない驕慢な性格は、ことごとくに仰々しい浴室の造りからも見て取れる。ベネットは玉座の壇を降りてモザイクの床を跨ぎ、磨き上げた花崗岩の流しで手を洗った。窓越しに眺める向こうはカールマンがわざとらしくへり下って言うささやかな庭である。手入れのいい雛壇庭園にオリヴの古木が枝を交して生い茂っている。イタリアから移し植えた、とこれはカールマン自身の口から聞いた。どれ



1 万事相談。ただし、結婚は除く

を取っても樹齢二百年は下らないという。ベネットはざっと見積つてみたことがある。オリイヴの林だけで小ぢんまりした家が一軒買える計算だった。

埃除けの灰色の布をかけた家具の間を縫って階下に降り、防犯装置のスイッチを入れて外に出た。枯草一葉なく掃き清められた車寄せに立って、ベネットは冷え冷えとした空気を胸いっぱい吸い、とっくりとあたりを眺めやった。眼下の谷に湧き出る朝靄や、碧く澄んだ空を背に咲きこぼれるアーモンドの花が確かな春の訪れを告げていた。この土地を離れて、いったいどこで暮すことができるのか。数年以前、フランスに移り住む決心を明かした時にある友人の言ったことが記憶に蘇った。フランスはいい国だよ。でも、フランス人は駄目だ。とうてい付き合いきれないって。君もきつと逃げるようにして帰ってくるに違いないんだ。ところが、ベネットはフランス人が気に入った。ほかへ行きたいとは思わない。

とはいえ、この先どこまで持ち堪えられるだろうか。無料奉仕の見返りに期待した顧客の紹介は沙汰もなく、不動産商売は上がったのである。別荘の持主たちはみな彼の働きに感謝して、クリスマスカードや、ボニーに乗った子供たちの写真や、フォートナム・メイソンのブディングや、あまりもののポートワインなどを送って寄越したが、これまでのところ、新規の買い手からは物件の問い合わせ一つない。イースターはもうすぐそこである。間もなく上等な家具調度から埃除けの布がのけられ、別荘に賑わいが戻り、冬の間ベネットが黙々と務めてきた仕事を家族連が自分たちですることになるだろう。しかし、まあ、無駄骨を折ったと諦めるのはまだ早い。陽気がよくなれば、また運が向いてこないとも限らない。

それにしても、当面どうするかが問題だった。サン・マルタン・ル・ヴィユーの小っぱな家に

帰る車の中で、ベネットはとつおいつ思案した。かつてロンドンとパリを足場に十年ほど携つていたテレビ・コマーシャルの制作に戻るのは気が進まなかった。もともと、世代交替の波に追われて逃げ出した世界である。当時すでに制作現場はイヤリングをしたむさくるしい若者たちの席捲するところとなっていた。彼らは独創性の権化をもって自ら任じ、ポニーテイルは芸術家氣質の象徴だった。ベネットはコマーシャルを卒業してハリウッドに進出した本当に有能なディレクターたちの感化を受けて育ったから、今さら若い世代と調子よく折り合う忍耐はない。彼らはしよせん毛並の悪い跳ねっ返りの新人類で、特殊撮影の多用で発想の貧困をごまかし、どこからロック・ビデオの演出を依頼する電話がかかってこないかと、いじましい夢にすがっているだけだ。そんなところへ、どうしてのこのこ後戻りできようか。

何とか金を掻き集めて、ヨットを横取りした悪党を追跡する考えもないではない。とは言うものの、広いカリブ海のどこに相手がいるとも知れず、船もエディ・プリンフォード・スミスも、とうの昔に名前を変えているかもしれない。カンヌのヘブルー・バーンで過した恍惚の一夜が記憶に蘇った。シャンパンの酔いに霞んだ頭で、彼らは四十五フィートの優美なヨットを浮かぶ英貨ヘフローティング・パウンドと名づけ、何やかやと計画を宙に描いた。ベネットはテレビ・コマーシャルで稼ぎ貯めた全財産をこの船にはたいていた。プリンフォード・スミスが営業を受持つて船を貸出し、チャーター料を山分けする約束だった。ところが、エディは若い女ばかりのクルーを仕立ててバルバドスへ向かったきり消息を絶った。いくら手紙を出しても梨の礫で、バルバドスのヨット・クラブに問い合わせると、そんな船も船長も出入りの記録にないという。いかさまエディはどろんした。地団駄踏んで口惜しがっても後の祭で、あの悪党め、魔の三角海域バーミューダ・